学　長　式　辞

新入生の皆さん、入学おめでとう。今年、埼玉大学の学部に入学した方々は、教養学部、教育学部、経済学部、理学部、工学部の 5 学部を合わせて 1,739 人で、この他に、2 年、3 年次への編入学者が合わせて 55 人、特殊教育特別専攻科への入学者が 14 人います。大学院研究科については、博士前期課程への入学者は 484 人、後期課程への入学者は 77 人です。これらの学生数は、いずれも定員を若干上回っています。全体として、2,369人の方々が新たに埼玉大学で学ぶことになりました。

新入生の皆さんも知っていると思いますが、今月から国立大学は全て法人化されました。法人化の意味を一言で説明することは容易なことではありませんが、敢えて言えば、大学が法人格をもつことで、従来と比べて、自主的に行動できる範囲が拡がったのです。それで、本学としては、これまで以上に、学修と研究にとって良い環境を作り出すよう努力していますので、皆さんは勉学に励んでもらいたいと思います。皆さんは、法人化された埼玉大学に入学した最初の学生、院生です。このことは、憶えておいてよいことだと思います。

この入学式には、学部に入学する方々と大学院に入学する方々の両方が出席しているので、まず初めに学部入学者に対して話をし、そのあとで、大学院入学者に対して若干の追加をしたいと思います。

学部入学者の方々は、長い受験勉強を経て、埼玉大学に入学したわけで、受験勉強から開放されて、大学での新しい生活を始めることに、大きな期待を抱いていることでしょう。また、これから始まる本学での学生生活に対して、いくらかの不安を感じている人もいると思います。

それで、最初に話しておきたいことは、大学というところは、これまでに皆さんが知っている高校以下の学校とかなり違ったところだということです。高校以下の学校では、クラス分けがはっきりと決まっていて、各クラスには担任の先生がいて、授業をするだけでなく、それ以外のことについても指導するというのが普通ではないかと思います。ところが、一般的に言って、大学では、学生一人一人に対して親切な指導をする体制を取っていません。現在、埼玉大学においては、学生生活の支援をこれまでよりも強化する体制を作りはじめていますが、それでも、高校以下の学校と同じような形で、教員が学生一人一人に接するということはあり得ないと思います。それには、少なくとも二つの理由があります。

その第一は、大学生の年齢が高いということです。皆さんの年齢は一番若い人でも 18 歳で、成年には達してはいませんが、もう大人扱いをすることができるはずです。大学

生は一人前の大人として扱う方が良いというのが伝統的な考え方です。したがって、学部や学科で、所属学生全体に対して、いろいろなガイダンスなどを行いますが、学生一人一人に個別に細かい注意を与えることは普通にはしないことです。ただし、質問をすれば、それに丁寧に答えることはします。そういう仕組みですから、入学直後に行われる学部や学科のガイダンスには必ず出席し、よく話を聴いて、分からないことがあれば、遠慮をせずに質問することが必要です。この点は是非忘れないようにして下さい。

大学生を大人扱いすることは、卒業してから社会に出るための準備として重要です。昔の諺に、「家の外に出ると、7 人の敵がいると思え」という意味のものがあります。これは、昔の社会生活の難しさを教えているものですが、この点は、今でも基本的には変わっていません。大学生に、手取り足取りの指導をしないのは、世の中の厳しさに予め触れてもらうという意味があります。

手取り足取りの指導をしないことの、もう一つの理由は、大学の先生は、高校以下の先生とは違って、学生に教えることだけが仕事ではないということです。つまり、大学の先生は、学生に教えるという意味で教育者であるだけでなく、自分が専門とする研究をする研究者でもあるということです。

埼玉大学の 5 つの学部等に所属する教員は、いろいろな学問分野の専門家です。したがって、講義などの授業をするほかに、毎日自分の専門分野の研究をしており、また、それに付随するいろいろな仕事をしています。やや具体的に言えば、研究を行って、その成果をまとめて論文にして、専門雑誌に発表します。また、単行本として出版する人もいます。研究をして、その成果を論文や本の形にするということは、大変時間のかかる仕事です。これらのほかにも、研究に関係するいろいろな仕事があります。また、大学院生の研究指導もしています。そういうわけで、大学の先生は、学部学生の面倒ばかり見ているわけには行かないという事情があります。しかし、先ほども言ったように、皆さんが講義を聴いて、その内容で分からないことを質問すれば、先生はきちんと答えてくれるはずです。先生にはどしどし質問をして下さい。遠慮は無用です。

要するに、大学というところは高校以下の学校のように面倒見の良いところではありません。学部に入学する学生諸君は、この点を理解して、みずから積極的に行動して欲しいと思います。必修科目と選択科目があるので、何を選択科目として学ぶかをまず決めなければなりません。履修するべき講義や実験、実習、演習には必ず出席して下さい。欠席しても、咎められることはないのが普通です。これは、学生を大人扱いしているからです。学生は自分の責任で勉強するのが大学というところです。誰からも咎められないので、欠席を続けると、講義などの授業に付いていくことができなくなります。そうなると、当然、期末試験にパスすることはできませんから、単位を取ることができません。

講義などに欠席するということは、自分の義務を履行しないことですが、見方を変えると、折角授業料を払って得た自分の権利を放棄することでもあります。この場で、金銭の問題を引き合いに出すことは、適切ではないかもしれませんが、敢えて言うと、1回の講義に皆さんが払っている授業料はおよそ 2,200 円です。これは荒っぽい計算から出てくる数字ですが、大雑把に言って、講義に 1 回欠席すると、90 分間に、これだけのお金を無駄にしたことになります。

話がやや具体的になり過ぎたかもしれません。ここで、新入生の皆さんに、学部に在学している間に、心掛けてもらいたいことについて話しておきたいと思います。それは、現在、世の中で起きているさまざまな事柄について、関心を持ち、それらの事柄の背景にあるものを、積極的に勉強しようという姿勢を持ってもらいたいということです。言い換えれば、いろいろな事柄に知的興味を持ち、それらを研究するという態度を身につけてもらいたいということです。

大学での授業内容は、現在、世界で起きている事柄を直接取り扱うことは少ないと思います。それは止むを得ないことです。大学でまず学ぶことは、既に体系化された学問の内容なので、それらは、現実の世界で問題になっていることとどこかで繋がっているはずですが、現実の問題自体を扱ってはいません。そういうわけで、大学での授業内容に飽き足らないものを感じることがあるかもしれませんが、基礎をしっかりと身に付けることは絶対に必要なことなので、授業内容を軽んじてはいけません。

授業で与えられる基礎知識を身に付けること、これは、第一にしなければならないことですが、私が言いたいことは、それだけで満足するのではなく、もっと意欲的に勉強して欲しいということです。自分が興味を持てる事柄について、自分で更に深く追及することが、これからの学部学生に求められるのです。21 世紀に入って、世界は恐ろしいほどの勢いで変わりつつあります。国際政治、経済、金融、産業、科学と技術、医療、環境、エネルギーの問題などは、私達の毎日の生活に直接影響を及ぼしており、しかも日々変化しつつあります。これらのどの問題をとっても、その全貌は簡単に把握できるものではありませんが、それらに知的興味を持てば、単行本、雑誌、その他のメディアから情報を得ることは比較的容易です。学部学生の手に余るものもありますが、努力すれば、学部学生でもある程度まで理解を深めることはできると思います。

ほんの 1、2 の例をあげます。現在の世界を揺さぶっているイラク問題とその元になっているパレスチナ問題は、地理的には日本から遠いところで起きていることであるにも拘わらず、今やアメリカとその協力国の政権を揺るがしかねないものになっています。また、この問題に絡んで世界中で起こっているテロに、私たち日本人が巻き込まれる危険性もあります。この問題は、2,000 年以上に及ぶユダヤ民族とその国家の問題、1,300

年以上に及ぶイスラム教とキリスト教、ユダヤ教との対立に、その根源があることはよく知られているところです。好むと好まざるとに拘わらず、この問題に、もっと深く立ち入って、正確な知識に基づいた意見を確立することは、私たち日本人にとっても必要になっています。この問題を扱った書物は、本学の図書館にもいくらか置いてあるはずですが、さいたま市内にある大きな書店に行けば、最近出版された本があるはずです。また、東京まで足を伸ばして、神田の書店街やその他の大規模書店に入ってみると、多種類の書物を見つけることができます。これらを手に取ってみると、もっと知りたいという知的興味が湧くに違いありません。

科学と技術も大きく変化しつつあります。その代表例は、ヒトゲノムの解読と、それに続くバイオサイエンスの発展、それに基づく難病や遺伝病の治療方法の開発、さらには、最近新聞でよく見かけるようになった胚幹細胞あるいは ES 細胞の再生医療への応用の問題などです。これらは、人類に対して素晴らしい贈り物をもたらす可能性を持っていますが、その反面で、生命倫理上の難しい問題を投げかけてもいます。これは、人類が未だ経験したことのない、新しい問題です。DNA の 2 重らせん構造が、当時ケンブリッジ大学の無名の研究者であった、James Watson と Francis Crick の 2 人によって提案されたのは 1953 年のことでした。昨年は、その 50 周年にあたり、それを記念して Watson 自身が“ DNA The Secret of Life “という本を出版しています。この本は既に訳書が出ているので、それを手に入れることは簡単です。もちろん、ネット書店などを通じて、原書を購入することもできます。また、同じ Watson が、1968 年に出版した“ The Double Helix ”（2 重らせん）も大変面白い本です。訳書が文庫本として出版されているので、学部学生も容易に読むことができます。これら二つの本を読み合わせると、50 年という、地球や人類の歴史のなかではごく短い期間に、生命の本質について、どれほど多くのことが分かったか、今後どのような展望があるかをつぶさに知ることができます。研究の現場にいた、Watson による生き生きとした描写は、読む人を惹きつける力を持っているので、皆さんもきっと面白いと思うに違いありません。

わずか二つだけの例を挙げましたが、これら以外にも、興味を持てる対象が沢山あるはずです。是非そういうものを見つけて、それらを深く理解することに挑戦してもらいたいと思います。学部学生時代に、研究的な態度を身につけることは、皆さんの一生にわたって役立つことと確信します。

大学院に入学する方々は、指導教員と相談して、研究課題を決めて、それについて研究を行うことが普通だと思います。その際、指導教員の助言に従って、実際的な研究活動を行うことになりますが、単に言われたことを実行するだけでなく、自分自身の考えで新しい研究手法を導入したり、研究を新しい方向に発展させるよう努力してもらいたいと思います。研究というものは、多くの場合、重箱の隅をつつくような感じのするものですが、それをもっと魅力的で、発展的なものにするのは、実際に研究を行っている

人の能力、意欲、努力であるということを自覚することが必要です。目の付けどころを、高いところに置いてもらいたいと思います。また、とくに理工系の研究では、何か腑におちないことにぶつかったときに、それを放置しないで、徹底的に追及することが大切です。このような努力が、新しい重要な発見につながった例が多数あります。このことは、よく憶えておいてもらいたいと思います。

最後に、新入生の皆さんが、埼玉大学での生活を有意義に、かつ楽しく過ごして、所定の期間内に卒業あるいは修了して、学士、あるいは修士や博士の学位を取得することを願って、私の挨拶を終わります。

平成１６年４月８日

埼玉大学長　田 隅　三 生